

淀川水系流域委員会 第 14 回琵琶湖部会 現地視察（H14.6.4）結果概要

1. 開催日時

平成 14 年 6 月 4 日（水） 9：30～18：00

2. 視察コース

第 14 回琵琶湖部会では、丹生ダムが計画されている高時川流域を視察した。

高時川下流域に位置する余呉町では、河川管理者より丹生ダム全般についての説明が行われ、その後、現地の自然に詳しい方・琵琶湖の水と暮らしに詳しい方・丹生ダム計画によって移転された元住民の方々からお話を伺った。

午後には、丹生ダム計画により移転した鷲見集落跡に移動し、元住民の方から当時の暮らしぶりについてお聴きした。その後、淀川の源の碑、余呉高原スキー場を視察した。夕方、会場に移動し、主に丹生ダム計画について地元の方々との意見交換と、中間とりまとめに対する河川管理者からの質問への対応や今後の部会の進め方についての議論が行われた。

3. 概要

（1）ご意見をお伺いする会

余呉町にてご意見をお伺いする会が開催された。まず、河川管理者より丹生ダムについて説明が行われ、その後、現地の自然に詳しい方、琵琶湖の水と暮らしに詳しい方、丹生ダム計画によって移転された住民の方々のお話を伺った。

河川管理者（水資源公団）からの説明

- ・丹生ダム建設事業の目的、水資源開発公団事業実施の手順について説明が行われた。
- ・丹生ダム事業の経緯として、地元との協力関係、生活再建関係、水源地域の整備について説明が行われた。

意見交換

委員：クマタカの営巣地の放棄、工事濁水による漁業への影響等々、ダム計画によって負の影響が生じている。こういったことも、きっちりと説明して頂きたい。

水資源公団：クマタカについては9月頃に報告したい。また、道路工事による濁水については沈殿池等によって対応している。今後、情報を提供していきたいと思っている。

部会長：これからは、過去のデータ等について、より具体的なものを出して頂きたい。例えば、「濁水がなぜ発生してその時どのような対応したのか」、或い

は「仮にあることが発生した場合にどう対応するのか」といった具体的な情報を提供して頂きたい。

委員：ダムと地元とのこれまでの経緯や、地域振興にとってダムが必要だということも理解できるが、ダム以外の方法があるかもしれない。世紀単位で環境を考えていかなければならない今、社会全体で受け入れていくことができるなら、そのためにきちんと議論していかなければならない。

高時川流域の自然についてのお話

- ・高時川源流には、ワシタカやツキノワグマが生息している手つかずの自然が残されており、動植物が健全な状態で生息している数少ない地域となっている。
- ・この自然を残すためには、今のまま、何もしなければ大丈夫だと思う。丹生ダムの湛水地域とは離れているので、ダムの直接の影響はないと考えられるが、ひとつ心配なことは、余呉高原スキー場の工事によって、これが破壊されるかもしれない。

暮らしと水とのかかわりについてのお話

- ・かつて、川の水をすくって飲み、川の水を使って風呂に入っていた。川の水を大事に使っていた昔は、上流の者は下流に住む人のために排水にも気を遣っていた。蛇口をひねれば水が出てくる、お湯が出てくる便利な時代になり、そういった水文化が失われてしまった。
- ・子供たちは「川は危険だから、近寄ってはならない」と言われ、川からどんどん遠ざかっている。これからは「水に親しむ」ということを子供たちに伝えていかなければならない。

丹生ダム計画による移転住民の方々のお話

- ・冬期の生活の厳しさ、度重なる洪水、生業だった木炭の需要の減少、若者の都会への流出等々、非常に厳しい生活を強いられてきた。そこにダム計画が持ち上がり、国の要請に従う形で故郷を捨て移転することを決めた。しかし、やはり「犠牲」になったという気持ちは捨てきれない。
- ・この流域委員会では「ダムは不要」といった論調が強いそうだが、ダム計画によって移転した私たちの気持ちを反映した議論をお願いしたい。

(2) 鷲見集落跡

丹生ダム計画により移転した鷲見集落跡では元住民の方から当時の暮らしぶりについてお話を伺った。

(3) 淀川の源の碑、余呉高原スキー場

淀川の源の碑、濁流の原因となっている余呉高原スキー場を視察した。余呉高原スキー場では、事前に場内の視察の申し入れを行ったが断られ、外部からの視察となった。

(4) 地元の方との意見交換

高時川流域の歴史的経緯について

- ・最近の水害も減少しつつあるが、かつて高時川は数多くの水害を経験してきた。多い時には年に2、3回水が溢れ、そのたびに家屋や畑が被害を受けてきた。こういったことが繰り返され、多くの人が町を離れていった。
- ・その一方で、深刻な水不足にも悩まされてきた。かつて、水をめぐって上流部と下流部で「井落とし」と呼ばれる合法的な水げんかが行われてきたが、昭和14年を最後にこの伝統も失われてしまった。

意見交換

委員：かつての洪水や渇水の苦勞を若い人たちはどれだけご存じなのでしょう。また、今もなお洪水の危険性があることを地域や若い人たちはどれだけ実感されているのでしょうか。

意見発表者：残念ながら、そういった関心や危機感は薄れつつあると思います。

委員：琵琶湖の自然環境は100年、1000年単位で推移してきました。しかし、この30年の間に、自然環境がドラスティックに変化してきています。この現状に対して、ダム計画を推進している地元ではどのような議論がなされているのでしょうか。

意見発表者：数多くの議論をしてきました。一例をあげると、地域の婦人の皆さまに無理をお願いして生活排水に関する問題についてご議論して頂きました。私たちとしては、特に農業排水が琵琶湖に大きな負荷をかけていると思っています。

委員：ダムが琵琶湖に与える影響というのは、今のところ、ほとんど何も分かっていません。しかし、ここ10年の北湖の状況を考えると、20年、30年後に後悔しないためにも一度しっかりと調査した方がよいのではないかと考えるのです。

余呉町と丹生ダム計画について

- ・昭和54年、建設省よりダム計画のための調査依頼があつて以来、余呉町ではダムについて真剣に議論されてきた。その結果、国によるダム計画が中止になった前例がない以上、ダム計画を契機にして、ダム水没地の住民の生活再建対策と悔いのない町づくりを要請していくという方針を選択した。
- ・丹生ダム計画による水没集落は、豪雪と洪水など過酷な自然条件に加え、生業であった木炭需要の減少によって、非常に厳しい生活を強いられていた。そんな折り、ダム計画が持ち上がり、町からの度重なる説得もあつて、故郷を捨て移転することをやむなく受け入れたという経緯がある。
- ・現在、余呉町としては、ダム対策委員会を主体として度重なる検討・討議・説明会を実施し、ダム本来の機能である治水・利水はもとより、自然豊かな水源地に多くの人

- が訪れるよう、また、上下流の交流を深めるための事業や施設整備を進めてきている。
- ・ダムをはじめとした大型公共事業が逆風の中にあるということは理解している。しかし、世の中が変化したとはいえ、「なぜ、今さらダム中止なのか」といった強い気持ちがある。予備調査から34年、調査受け入れから18年が経過しているが、一日も早いダム完成はダム計画による移転者や町に対する責務なのではないか。

意見交換

委員：「ダムは地域の生活基盤のために必要」というお話だったと思います。そのための具体的なプランがあればお聞かせください。

意見発表者：上下流の交流が一番大事だと思っています。具体的には、ダム完成に合わせて茶わん祭りの館や妙理の里、ウッディパル余呉といった事業を進めてきましたが、肝心のダム完成が遅れていることが大変残念です。

ダム完成後の自然保全・管理についての議論を

- ・ダム建設について上流と下流で意見は対立していたが、「調査受け入れやむを得ず」という方針が決定してからは、丹生ダム対策委員会を中心に上流・下流・中河内部会が一丸となって取り組んできた。現在、厳しい社会・経済情勢の中、思うように予算配分が受けられないと聞いてはいるが、地元としては計画通りの早期ダム完成を願っている。
- ・流域委員会では「ダムは不要」といった論調が強いようだが、これはダム計画によって故郷を明け渡した住民の感情を踏みにじったものである。
- ・丹生ダムでは、平成6年度に丹生ダム周辺環境整備検討委員会が設置され、環境にやさしいダムについて種々検討がなされている。人の手の入らない自然は荒廃していただくだけである。ダムが完成した後の自然保全や水質管理について議論することが何よりも必要ではないか。

意見交換

委員：苦渋の選択の末、ダムを受け入れたということは重々承知していますが、この委員会を通じて、地域の方たちの暮らしを知りたいと思っています。環境というのは、暮らしだと思っています。100年後、200年後、この地域がどうやって山や川や田んぼと一緒に暮らしていけるのか、そういったことを考えていかなければならないと思います。

委員：水没予定地の鷲見地区を見てきましたが、上流部の方が全く住んでいないところでも水質が悪化しているように感じられた。あの水を貯めて本当に安全なのか、疑問に思った。調査した方がよいのではないか。

意見発表者：最初は、ダム反対の声が大きかったです。しかし、避けることができないものとして、ダムを受け入れざるを得なかった。いまさら「ダムをやめる」と言われても感情的にも納得できない。

今となっては、ダムと自然とどう調和させていくのか、余呉町をどう活性化していくのか、それを考えていかなければならない。

委員：この30年で社会も経済情勢も大きく変化した。また、自然環境も悪化の一途をたどっている。水を汚し、琵琶湖を汚すダムに頼った地域でよいのか？ あらためて、本当にダムが必要なのかを見直して、ダム以外の方法はないのか、考えるべきだと思います。

意見発表者：それは机上論ではないか。他に方法がないから、ダムを選択してきたということを理解して頂きたい。

一般傍聴者からの意見

- ・丹生ダム計画については、議論に議論を重ねて結論を導き出してきた。丹生ダムは単なるダムではなく、町づくり、地域づくりの核となっている。
- ・流域委員会では、自然環境に関する議論が中心となっているということだが、余呉町では天然記念物のカモシカやクマ等による被害が増大しているという現実がある。
- ・どういった主旨でこの委員会が開催されているのかは知らないが、地元にとっては大変迷惑な会議である。地元としては一日も早いダム完成と予算増額を願っている。

意見交換

部会長：確かに大変ご迷惑な会議であるかもしれませんが、河川法では、こういった委員会をつくって様々な議論を行うと共に、住民の皆さまからも意見をお聴きする機会を設けなければならないとなっています。この流域委員会は、法律に基づいて設置されていますので、その点はご理解頂きたいと思います。

(5) 委員による意見交換

中間とりまとめに対する河川管理者からの質問への対応等、今後の部会の進め方について意見交換が行われた。

- ・河川管理者からの質問に対応するために、6月17日(月)13:30~16:30に部会を開催する。次回の部会では、質問に対する様々な意見を出し合って、琵琶湖部会として認識を共有していくことが重要である。
- ・委員は河川管理者からの質問のうち自分が担当すべきと思われる箇所について回答案を提出する。
- ・今回の現地視察は不本意だった。水没するダムサイトから鷺見地区や道路工事現場も見ておく必要があったと思う。また、濁水の原因となっている余呉高原スキー場もあらためて視察する必要があるのではないか。その際には、地質的な問題について意見を頂くために専門家を呼んではどうか。
- ・現地を視察する以前に、まず、ダムについて理解を深めるためにも、丹生ダムがどのようなダムで今後どのような管理がされていくのか、どのような水位操作を予定しているのか、今日紹介して頂いた地域再建のプランの他にどんなオルタナティブがあるのか、といった具体的な情報を提供して頂きたい。
- ・今日は感情的な意見が目立ったが、もし、琵琶湖サイドから見たダムの影響が徹底的

に議論されないままダム計画が推進しているなら、きちっと調査しなければならないと強く感じた。

- ・ダム計画がここまで進んでしまっている以上、最も大事なものは地元の声であり、地元がどんな地域ビジョンをつくっていくかということではないか。そのためにも、流域委員会として、個々の地域の話をお聴かせってもらう機会をつくらなければならない。
- ・ダムの存在によって、上流と下流の連続性が保たれ、自然環境が良い状態で維持されている例は、日本では数例しかない。丹生ダムで具体的にどうすればそういった稀有な例を実現できるのか、地元のご意見もお聴きしたいし、逆に委員会から何か提案ができるかも知れない。難しいとは思いますが、もし可能であれば今後そういった機会を持っていきたい。
- ・ダムが完成すれば人がやって来るという幻想があるが、おそらくそれは無理だろう。本当にどういったオルタナティブがあるか、具体的に提案していかなければならない。

第 14 回琵琶湖部会（2002.6.4） 現地視察 行程

時間(予定)	乗下車地	内容等
	()内は所要時間(予定)	
9:30 集合	JR 長浜駅	<ご参考> JR 京都駅 8:18 発 JR 長浜駅 9:21 着
9:40 出発		
	(50)	(国道 8 号線を北上 国道 365 号)
10:30	余呉町山村開発センター <ご意見をお伺いする会など>	10:30 ~ 10:45 河川管理者(水資源開発公団)より丹生ダム全般 (現況、目的、環境対策等)について説明と質疑応答
12:20		10:45 ~ 11:30 <ご意見をお伺いする会> ・村瀬正成氏(現地の自然に詳しい方・生科学総合研究所) ・本田靖子氏(水環境カルテの作成に携わった方) ・余呉町役場より、ダム計画による住民移転の経緯等の説明 ・ダム計画による移転住民の方々 (谷口長三氏、久保保氏、横山屯氏)
		11:30 ~ 12:20 昼食(お話を伺った方々も交えて)
		(40)
13:00	中河内	トイレ休憩
13:20		・マイクロバスからワンボックスカー(4WD)に乗り換え
	(30)	(半明、針川、尾羽梨を經由)
13:50	鷺見集落跡	ダム計画により移転した集落跡
14:05		

(30)

14:35
14:45

中河内

トイレ休憩
・ワンボックスカーからマイクロバスに乗り換え

(15)

15:00
15:25

淀川の源の碑
余呉高原スキー場

余呉町役場の方より説明

(35)

16:00
18:00

ホテルプリオール
<会議>

16:00～17:00 地元の方等との意見交換
(当日会場に集まっていたいただいた方々との意見交換を予定しています)
・高時川治水対策促進協議会会長 高月町長 北村又郎氏)
・余呉町 助役 是洞尚武氏
・丹生ダム対策委員会 委員長 三國昌弘氏 等
17:00～18:00 委員による意見交換